令和５年度広田中学校学校経営方針

令和５年　４月　１日
佐世保市立広田中学校
校長　高橋　正伸

『小　事　が　大　事』

・大事は、小さなことの積み重ね。些細なことをおろそかにしてはならない。
・機動力の積み重ねこそ、やがて大きな教育力に結び付く。

＜学校経営の理念と方針＞

１　学校経営の理念

「令和」という節目の５年目を迎えるにあたり、今後、コロナ終息に向けた社会環境の中で学指導要領が求める質の高い教育の実践や３学期制度における教育内容の充実等、柔軟かつ多様な教育環境への取組が求められることになる。

その中で中学校教育においては特に部活動ガイドラインや、働き方改革の実践など、教育環境の大きな変化が待ち受けています。

これからの今後の学校運営の実際として、確実に待ち受ける変化や想定を超えた変化に対して、引き続き柔軟で効果的な校内の取組等が求められます。

今後、組織としての取組や、教育専門職としての使命や熱意、愛情をもって信頼ある学校づくりに努めていかなければなりません。

その中で、目の前の子どもたちにとって、学力や正しく考える力を養い、キャリア教育における実践を踏まえ、将来に向けて心豊かに逞しく生き抜く力を育んでいきたいと考えます。

今何が大切なのか、何を与え、何を学び取らせ、何を共に育まなければならないのか、教育の専門職にある私たち教師は、あらためて考え抜かなければなりません。

日常の些細な行いや出来事がやがて、すべての大事に結びついていくことを自覚し、大事に隠れた小事をこの上なく大切にしたいと考えます。

２　学校経営の基本方針

（１）まず児童生徒がいて、学校がある。

学校は、かけがえのない命を預かる場であり、人間形成の場である。
その中で児童生徒は、教師に学ぶ。
教師は、同僚に学び、他に学ぶ。時として子に学び、自身を振り返る。
“謙虚さを忘れることなかれ”

（２）学校の軸は“教育の力”であり、学校の基盤は“信頼・信用”に尽きる。

学校をピラミッドに例えたとき、積まれた石の一つ一つが信頼や信用にあたる。
基盤である積み石が崩れれば・・・・。
教職員は、学校を出れば“私人”であるが、“公人”としての立場は免れないことを改めて自覚したい。

（３）「帰宅後３０分の取組～帰宅後身支度を整え、机につくという大切な習慣づくり～」

基本的な生活習慣を定着することが、心の安定や効果的な時間の使い方につながり、やが学力の獲得や、心身の健康につながる。

規則正しく日常を過ごす習慣を地道に身に付けさせるとともに、将来を見据えた生き方をする上で大切な作業を、計画的また確実に定着させていく。この取組は、校内にとどまらず、地域へも発信しながら協力・理解を求め取り組んでいく。

（４）「語彙力の向上」～児童生徒の「言葉の力」「伝える力」を育む

コミュニケーションツールは飛躍的な発展を遂げているが、社会を生き抜くうえでは、ツールを介さず、感情や思いを直接交し合う力の獲得は欠かせない。

新聞や書物といった文字環境が薄らいでいく中で、教科書が読めない、理解できないといった、明らかな語彙力の低下が認められます。

児童生徒にとって、流行にとらわれない正しい言葉遣いや表現力は、やがて社会に生きる上で欠かせない生活能力に結び付く。授業はもちろん、日常の学校生活全体を通して、児童生徒の「言葉の力」「伝える力」を育みたい。

めざす力は、“身近な集団を営む力”の獲得である。

★令和３年度「読売新聞　語彙力向上プロジェクト」　の実践！

★令和４年度「プレゼンテーション教育」　の始動！

★令和５年度「プレゼンテーション教育」　の実践！、「語彙力向上」の校内発表会

（５）学校は組織体、教職員は共同体である。

①　教室の雰囲気は、職員室の雰囲気に等しい。

職員室に笑顔のない学校に生徒の笑顔はない。教職員同士が切磋琢磨し、フォローしあってこそ、安心とゆとりが生まれるもの。

②　「無理です」「できません」は禁句です。～知恵と経験、感性の結集を！～

「できるわけがない」という意識は捨て、「できるかも知れない」という思いを大切にして、先ずはチャレンジすること。

「もっとうまくいく方法がある」という思考（批判的思考・クリティカルシンキング）を繰り返しながら、前進する集団でありたい。

（６）学校の透明化

①　地域教育の拠点として（保護者・地域からの理解と支援）

学校は、常に地域社会の中心にある。保護者、地域の方々は、学校に対する理解者支援者と捉えたい。特に保護者にとって、子どもの学校でのようすがわからないことこそ大きな不安である。授業進度、授業内容の公開、時宜を得た学校情報の発行、学校HP の充実に努め、学校の透明化を図りたい。

②　教育行政、福祉等、関係機関との連携

学校は、さまざまな機関と連携し、支援を受けてその運営が成立している。

社会全体で学校がささえられていることをあらためて確認したい。

③　地域連携を踏まえたキャリア教育の実践

＜３つの視点＞

- **「地域の後継者」であれ**

　→地域を直接担い、地域を末永く受け継いで生きていく人であれ

- **「地域の協力者」であれ**

　→地域の周囲に身を置き、いつでも協力できる立場として生きていく人であれ

- **「地域の理解者」であれ**

→地域からは離れても、いつでも地域のことを忘れることなく、こよなく地域を愛し続ける人であれ

教師が地域にふれて教育を行う時、子どもに対して伝え続けていることがある。

それは、人としての生き方として、自身の姿を常にイメージしながら生きていくことを備えさせることである。

日常の学びや所作に自身の生き方を照らし合わせる場面が多ければ多いほど、自身の生き方を未来や将来という長い時間軸の中で考えることができるようになる。やがてそれが力強く生きる力となると信じる。

３　基本的生活習慣と基本的学習習慣の獲得～「放課後３０分」の取組との関連～

（１）基本的生活習慣の獲得に向けて

①教師と児童生徒が、目と目をあわせて、笑顔で言葉を交わす場面があふれる学校環境でありたい。身の回りの整理整頓、身だしなみは、教師も児童生徒もあるべき姿は同じである。

②時間には余裕を持って行動する。行動させる。

③“持ち物を整える”何のためか？　気持ちよく次に使うためである。

（２）基本的学習習慣の獲得に向けて

① 学習規律の共有化

各学年の発達段階に応じて、学習規律の内容には多様性があってよい。

なお、そこには学校全体、学年全体で共通して実践する学習規律や学習方法が学校の取組の基盤が大切。真剣に教え、真剣に学ぶ雰囲気の醸成。

学習基盤の例⇒“板書ルール”” 机の整列“” 時間厳守“” 自己評価力の育成“等の徹底学力向上に向けての小事である。

② 学習動機の醸成～成果を褒める、過程を認める～

授業姿勢や課題、作品や運動能力等、児童生徒がやればできることを、教師の言葉で認めてあげたい。教える側の日々の小事と考えたい。

（３）生活指導・生徒指導

＜　心がけたいこと　＞

① 児童生徒の受け取り方は、常に変化している。また、さまざまである。時として毅然とした指導は必要であるが、子をよく知らずに行う一方的な指導は、成果を生まない。

② 課題を抱える児童生徒には、保護者、子のニーズを見極めたい。
特別支援については、特に子の情報を共有し、対応・指導の質を上げたい。

③ 児童生徒の表情、校内（朝・昼・夕）の変化に気づきたい。

④ “してみせる、させてみる、褒めてやる”

＜規範意識の醸成～ルールとマナーの意識向上～＞

★ルールーやマナーを身に付けることは、将来の人間性をまさに支える礎となる。
そのためにも、「相手を大切に思う心の表現方法を知ること」という本質をしっかりと理解させなければならない。

４　校内の教育環境の工夫～見て学ぶ、感じて学ぶ、考えて学ぶ教育環境の工夫～

（１）“見て学ぶ”　～教材、ノート、各種資料他

（２）“感じて学ぶ”～図画、書、体験学習の成果、写真、動画他

（３）“考えて学ぶ”～各教科のポイント、知識学習につながる教材他

５　教職員の服務（不祥事の根絶）

いうまでもなく、教職員の言葉、ふるまいは、社会の注目を受けることがしばしばである。その中で、信用失墜に結び付くような不祥事は、あってはならず根絶しなければならない。本校が定めた、不祥事の取組に沿って、地域・保護者から信頼ある教師集団を引き続き構築していかなければならない。